

---

# 導かれし者が幻想入り lock pass meseege.

澄田 康美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

導かれし者が幻想入り    l o c k    p a s s    m e s s e e g e .

### 【Nコード】

N 5 9 0 2 N

### 【作者名】

澄田   康美

### 【あらすじ】

とある青年と妖怪の存在は、幻想郷にどのような波紋を立てているのか。幻想郷の過去を舞台に、二人の数奇な旅が始まる！！

## プロローグ（前書き）

### 諸注意

この話は東方の二次創作イメージよりも、オリキャラ＋オリ小説のイメージの方が強いです。まああくまで幻想郷な訳ですから、しっかりと東方キャラも出していきます。ではどぞ。

## プロローグ

### プロローグ

都会の夜は、明るくてもどこか冷たい感じがする。皆自分の事で手一杯なので、心から他人を思いやったりする余裕がないのだろう。

そんな冷たい世界に、異端とも言える生き方をする者がいる。

その者の名は人橋ひとはし 浮世うきよ。若い立派な社会人である。

彼は、友人や家族、大切にしている者などの為ならばどんな事も惜しまない、自己犠牲をモットーとした人間なのである。

夜の街で彼は、警備員の仕事を真っ当し、今丁度、家へ帰る途中なのである。

住宅街を楽しそうに歩く浮世。その理由は携帯で彼女とメールのやり取りをしていたからだ。

若いだけあって軽快にやり取りをする浮世。返信を待つ時間すらも、彼にとっては至福である。

だがいくばくかのやり取りをしている内に、一通のメールが彼の顔、いや、彼の全身から至福を奪っていった。

その一通のメールとはこれである。

ごめんなさい。別れまし

よう。

何の事はない。彼氏彼女ではありがちな別れのメールである。

面と向かって言う必要のなくなった現代社会に置いて、この一言を伝えるのはとても楽だろう。

だが、送られた方はただ悲しみに打ちひしがれるしかない。

浮世は鬱憤とした気持ちを携帯を投げてさらに落ち込ませ、自分の家に帰ってベッドの枕に顔をうずめた。ベッドは涙で自然と濡れていった。

どうしようもないやるせない気持ち。もう寝る時間なのに寝る事もできない。

少しして、ベッドにいても仕方ないと判断した浮世はリビングにてテレビをつけた。

時間とチャンネルが悪かったのか、テレビにはザーツとした砂嵐しか移っていなかった。

浮世はチャンネルを変える事もなく、なぜかテレビの画面に手を伸ばした。一種の現実逃避状態になっているのであろう。

その時であった。手を伸ばした瞬間にテレビの画面が変わり、緑の森が見える景色に変わったのだ。

現代ではお目にかかる事はあまり出来そうにない景色。浮世は自然とその景色に惹かれた。

浮世は手を伸ばし続け、気がつけばその手はテレビの画面にまで届いていた。

だがその手は画面に触れるような形ではなく、その画面の中にでも入るかのように手がその画面を貫いていた。いや、むしろ画面がまるで水のようになっていたのだ。

軽い自暴自棄になっている浮世にとって、これは現実なのか夢なのか判断できていなくなっていた。

多分夢だろうなとおもったその瞬間、浮世がその部屋から突如姿を消した。

誰一人いなくなった部屋で、テレビから元の砂嵐の音だけがただ鳴るだけであった。

## プロローグ（後書き）

後書き

みなさんこんにちわ（こんばんわ）。三人一緒に幻想入りでお馴染みの方がいるのかわかりませんが、お馴染みのつもりの澄田です。

今回はプロローグからしつかり書いてみようと思ひまして、こんな形になったのです。

きっかけは友達のバクテリアさんから言われた、「お前に過去編を作る許可を出そう」って一言です。

実は言うとは過去編はこれとは違う物も考えていたんですけど、その場合は10年程度の昔ですのでちょっとなあって思ったんです。

ぶっちゃけますとこの話は三人一緒に以上に行き当たりばったりです。本当です。

オリキャラがかなり自重しないので、正直東方の二次創作って感じはしないかもしれません。

まあプロローグだけではまだわかりませんね。なので第一話ではつきりと言いたい事がわかると思います。

ノリとしては、ガンダムSEEDアストレイみたいな完全外伝に近いので。

では、第一話をお楽しみに。

## 第一話 大妖怪との出会い

### 第一話 大妖怪との出会い

鳥のさえずりと木漏れ日の差し込む森の中で、浮世は大の字になって意識を失って倒れていた。

さえずる鳥の一匹が浮世の鼻頭に止まり、浮世を起こすかのように鳴いた。

その声に浮世がゆっくりと瞼を開けた。鳥と目が合った瞬間、鳥はぱっと飛び去っていった。

上半身を起こし、辺りを見渡した。どこをどう見ても木がただ連なっていた。

自分がなぜこうなっているのか・・・浮世は何一つ理解する事は出来なかった。

立ち上がり、当てもなく浮世は歩き出した。前向きな性格なので、絶望する事もなく歩いていった。

少しして、浮世は運良く道らしい道に出た。そして今度はその道を歩き出した。

ただただ続いている森の道。現代にこんな道があるのだろうかと思いつながら、浮世は歩き続けた。

歩く中で、浮世はある事を思い出していた。テレビで見たあの映像である。

現代ではあまりない自然の織り成した芸術。考えてみればこの道はあの映像の中にあってもおかしくはない道だ。



だが、なぜそんな風景の中に、この俺がいるんだ？あれはあくまで映像のはずだろう？

そんな自問自答に、ある答えが出てきた。夢だと思っていたあの現象である。

もしや俺は、あのテレビから映像の世界に入った・・・とても思えばいいのか？

夢だと思っても、今まで歩いてきた中で紛れもなく残っている疲れと、ふとした痛みは、夢ではない事を浮世に告げた。

じゃあ俺は、一体どうなるのだろうか・・・

これからどうなるのかわからない自分自身。だがあくまで浮世は前向きである。何があるうとも前に進んでいれば何かにたどり着くだろうと不安になっていた心を奮い立たせた。

長い道を歩いて、浮世の前に滝つぼが見えてきた。

丁度喉が渴いていたので、浮世はその滝つぼの透き通るように綺麗な水を手を使って飲んだ。

喉の渴きを潤し、浮世はその場で休息を取る事にした。色々な事があつたのと疲れからであろう。

ごろんと横になって頭に手を回し、空を見た。小さな雲がいくつかあるが快晴の空である。

ここに来るまで、浮世は今だに誰にも会っていない。その事は浮世の心に少しの不安を残していた。

もしかしたら、映像の世界には人一人いないとでも言うのか？

ありえない状態である今の現状。浮世の持ち前の前向きさを持ってしても今の現状に不安は出来てしまう。

ただぼーっとして休んでいると、浮世の頭の中にある言葉が飛び込んできた。

お願い・・・こっちに・・・来て・・・

誰かが助けを懇願するような言葉。浮世は驚き以上に、その言葉を誰が送ってきたのが気になった。

浮世の持ち前の正義感は、今の彼を動かすのには十分過ぎたのである。

浮世は誰かも知らない、言葉を送ってきた誰かの元に行こうと立ち上がった。

しかし、冷静に考えれば、どこから送られてきたのかわからない以上、浮世にはどうにも出来ないはずだ。

だが浮世は、まるでそこにいるとわかつているのかのように、滝の方へと向かっていった。

浮世が滝の裏を覗くと、その裏には長く暗い洞窟が続いていた。

蝙蝠ぐらいいいかいそうにない洞窟を、浮世は迷う事なく進んでいった。足元すらおぼつかないはずなのに。

恐らく浮世は、誰かもわからない者の助けと思える言葉を信じているからこそ、ここまでできるのであろう。

しばらくして、浮世は洞窟の少し広い所に出た。そこは天井から少

しだけ日が差していたのでまだ明るかった。

水の滴る音が洞窟内で響く中、浮世はある物に目が留まった。

それは、額に御札が張られ、両手を錠と鎖で繋がれ、まるで聖書に出てくるキリストのように、洞窟の奥に貼り付けにされていた者だった。

浮世は得体の知れないそれを見た時、心の中になったわだかまりを確信へと変えた。

さつき俺を呼んだのは、きつとこいつだ。

根拠などありはしないのに関わらず、浮世はその者へと近づいていた。

近づいていく内に、その者の特徴がどんどん見えてきた。髪は腰辺りの長さ。服は汚れなどで少しぼろぼろになっており、顔は御札でわからないが、身体的特徴から若い女性と思えた。それがわかった時、浮世は気になって歩みを止めた。

なぜこんな若い女性が、こんな目にあっているんだ？一体この者は何者なんだ？

そう考えている内に、さつきのようにまた頭の中に言葉が入ってきた。

助けて・・・私は・・・何も悪い事は

してないの・・・

その言葉が飛び込んできた時、浮世は何の迷いもなく、その者の錠を外そうとした。

だが、恐らくは鉄と思える錠を、何の道具もなく外せる訳がない。悪戦苦闘するものの、錠はまったく外れそうにない。

浮世は自分の非力を嘆いた。指から血が出てもお、錠を外そうとした。

何度も何度もやり続ける浮世。その内口から思わず言葉が出てきた。

「くそお・・・外れるよ・・・外れるよお!!!」

と怒声を出した瞬間、さっきまで傷すらろくについていなかった錠が、急に壊れたのだ。

浮世はさすがに驚いたが、それよりも錠が壊れて体勢が悪くなったその者を、浮世は地面にぶつかる前に抱き止めた。

自身の手で抱えていても、浮世にはその者からあまり生気が伝わってこなかった。

どれだけ長い間、この人はこうされていたんだろうか・・・

浮世は、その者の顔についていた御札をゆっくりと外した。

見えてきたのは、浮世から見ても可愛いと思える女性の顔と、はつきりとする・・・額辺りに付いている大きな目であった。

浮世が困惑する中、さっきまで瞼を閉じていたその者が、ゆっくりとその瞼を開けた。

その目は生氣と同時に、人間にあるはずの瞳がなかった。

そしてその者は、弱弱しくも口を開いてきた。

「・・・君が、私を助けてくれたの？」

その言葉に、浮世はとりあえず返事を返した。

「・・・多分そうかな。」

事実、錠が何の前触れもなく壊れた以上、自身が助けたのかわからなかったのだ。

それでも、その者にとって浮世は恩人である。

「・・・ありがとう。」

笑顔で感謝の言葉を言われて、浮世は思わず顔が赤くなった。

「いや、俺は別にその・・・」

さつき以上に戸惑う浮世に、その者はこんな事を言ってきた。

「そう言えば、自己紹介が遅れていたね。私の名前は、ダイダラボッチって言うの。ボッチって呼んでくれたらいいよ。」

その一言に、浮世は変に反応した。

「え？ダイダラボッチ？確か、ある妖怪の名前じゃなかったっけ？」

その疑問に、ダイダラボッチがすぐさま返した。

「そうだよ。私とそのダイダラボッチだよ。」

その返答に、浮世の頭の中はもう訳がわからなくなっていた。どうにか冷静になって、浮世はそれとなく今の現状を整理した。

「い、今まであった事をありのままにまとめろぜ、俺はテレビの中と思う世界に来て、そんでもって淹つばにたどり着いて、助けの言葉が聞こえたから探してみたら、そいつがなんと妖怪だったんだ。」

何を言っているのかわからないだろうが、俺もよくわかっていないんだ。」

と一人で長々と言っていると、ダイダラボッチが浮世にある事を尋ねてきた。

「そう言えば、君の名前は何て言うの？」

「あ、ああ、俺の名前は人道 浮世って言うんだ。」

「人道・・・浮世かあ。いい名前だね。」

「そ、そうかな？」

少し照れていると、ダイダラボッチが浮世の手からぱつと離れ、浮世の前に立った。

気がつけば、さっきまでなかった生気が戻っていたようだ。

「とりあえず、私の声を聞いてくれたのは君だね？浮世。」

「ああ。」

「あれだけで、よく私がここにいるだなんてわかったね。」

「・・・正直、俺も半信半疑だったけど、何となくここにいるって気がしたって言うのかな・・・」

浮世は照れくさそうに軽く頭を掻いた。

「そう、まあどっちにしても、浮世は私を助けてくれた。浮世には

感謝してるよ。」

そう言つて、ずっと浮世に握手を求めてきた。

「はは、どうも。」

浮世も握手で答えた。

握手を解いた後、今度は浮世がダイダラボッチに尋ねた。

「なあ、何であなは、あんな事になつていたんだ？」

その質問をした時、ダイダラボッチはうつむき、暗い顔をした。どうやら答えたくないのか、思い出したくないであろう。浮世はすぐにその様子を察した。

「・・・答えたくないなら、別にいいよ。」

そう言つと、ダイダラボッチは申し訳なさそうな感じで顔を上げた。仕方がないので、浮世は違う質問をした。

「じゃあ、ここはどこなのか教えてくれないか？」

「・・・君のさっき言つてた事を考えたら、君はたぶん違う世界から来たみたいだね。それなら、この世界自体が何なのか、言つておいた方がいいね。ここは、忘れ去られた者が流れ着く場所、幻想郷つて言うの。」

幻想郷・・・浮世には聞き慣れない言葉であつた。だが忘れ去られた者が流れ着くという所から、浮世は目の前にいる者が妖怪である事に納得がいった。

そうか、妖怪は本来俺達の世界にいたけど、今となつてはこの幻想郷って所に流れ着いていった訳なんだな。

だがその答えを出したと同時に、浮世は最初から抱いていた疑問を思い出した。

じゃあ、なんで俺は、この世界に来たんだ？

その疑問だけは、どう考えても答えが出なかった。

浮世はその事について考えるのをやめ、今度はこれからどうするかについて考えた。

だが正直一人でこの事を考えても仕方ないと思い、ダイダラボッチに尋ねてみた。

「ボッチ、この辺りに人が住んでいる所はないか？あるなら教えてくれ。」

「うん、わかった。私についてきて。」

そう言うと、ダイダラボッチはさっき浮世が来た所を先先と進んでいった。

浮世はその後を追いかけていったのであった。



## 第一話 大妖怪との出会い（後書き）

後書き

どうも、プロローグで言ったとおり、第一話目にしても東方キャラ出てきませんでした。

まあ第二話どころか、もっと後で出してる人も普通にいますので、この程度ならまあまだマシですかね。

これからもオリキャラどしどし出していくと思いますので、どうか暖かい目でみてやってくださいね。

ちなみにこの話は三人一緒と違って前に名前とかは書きません。前の分から誰が喋っているか察してくださいな。

では、第二話をお楽しみに。

## 第二話 疑念（前書き）

ありのままあらずじ

彼女に振られた浮世はよくわからず幻想入りし、少し歩いていたら助けを呼ぶ声？がしたので行って助けてみたら、妖怪ダイダラボッチだった。そしてその妖怪に道案内してもらっている。

## 第二話 疑念

### 第二話 疑念

さつき浮世が歩いた道とは少し違う道を、浮世とダイダラボッチの二人が並んで歩いていった。

一応ダイダラボッチの案内の元、それなりに真っ直ぐな道を歩いていた。

だが浮世自体はさつきまでのダイダラボッチの様子から、道案内に一抹の不安を残していた。

こいつはちゃんと案内してくれているのか？

そんな疑心暗鬼が心の中で浮かんでは消えるを繰り返す内に、浮世は我慢できずに尋ねた。

「ボッチ、あなたは本当に道案内をしてくれているのか？」

その質問に、ダイダラボッチは適当な調子で答えた。

「うん。大丈夫だよ。私、ぼーっとしてるってよく言われるけど、方向感覚とか記憶力はしっかりしてるんだ。」

そっついながら、自分の頭を手を使ってアピールした。

その様子を見て浮世は、さつきとは違う、気になった事をダイダラボッチに尋ねた。

「なあ、正直に訊くけど、君は本当に妖怪なのかい？」

疑りの混じった視線に、ダイダラボッチはまったく動揺せずに答えた。

「・・・助けてくれたお礼もあるし、じゃあ、私が大妖怪ダイダラボッチだって所、特別に浮世に見せてあげるね。」

そう言った瞬間、人間の大きさであったダイダラボッチが、容姿が変わりながらどんどん大きくなりだしたのだ。

目の前で急に大きくなり、さすがに焦った浮世は、

「ちよちよちよお！？わかったわかった！！十分わかったから止めて！！」

と大きくなっていくダイダラボッチに懇願した。

その声を聞いていたのかいざ知らず、ダイダラボッチはあつという間に元の大きさに戻った。

元に戻ると、少し疲れた様子のダイダラボッチがこんな事を言ってきた。

「よくわかった？私が大妖怪だって事。でも本来の姿にはあんまりなりたくないの。疲れるし、みんなにも迷惑かけるし・・・」

と言っていると、立ちくらみでも起きたのかふらつとなりだした。その様子に浮世は、

「ボッチ！！」

と即座にダイダラボッチの傍に駆け寄り、倒れそうになっているダイダラボッチを支えた。

「大丈夫か！？ボツチ！！」

呼びかけの声に、ダイダラボッチは静かに答えた。

「大丈夫だよ・・・久々にやってみたら・・・いつもより疲れただけ・・・」

浮世が助けた時よりも弱弱しい声に、浮世は不安になった。

仮にも見知らぬ世界で始めて会った他者。それもこんなに弱弱しい姿を見せているのであれば、浮世にとってはただ不安が募るだけだ。気がつけば、浮世はダイダラボッチを抱えたまま涙を流していた。

「浮世・・・？」

その様子に、ダイダラボッチは不思議そうに尋ねた。

恐らくダイダラボッチは、浮世が誰の為に涙を流しているのか、わかっていないのであろう。

涙が出ながらも、浮世はダイダラボッチにこんな事を言った。

「頼む・・・無理だけはしないでくれよ・・・」

さつきとはまったく雰囲気の違いに、ダイダラボッチは心を打たれた。

そしてダイダラボッチは、こんな答えを導き出した。

「・・・うん。」

たったの一言だが、今の浮世にとってこれほど安らぐ言葉もないだろう。

次第に浮世の顔から涙は消え、元の笑顔が戻っていた。

その間に、ダイダラボッチは浮世の手元から離れ、また元のように二人並んで歩いていった。

並んで歩く中、ダイダラボッチが急に浮世の顔をじっと見てきた。気になった浮世は、

「な、何だ？俺の顔に何かついてるのか？」

と尋ねた。

その質問にダイダラボッチは、

「そうじゃないよ。ただね、浮世って優しい人だなあって思っただけ。」

と屈託のない、満面の笑顔を浮世に向けながら言った。

この様子に浮世は、今までで一番顔が赤くなった。ぼうつとした音でも出そうな勢いである。

浮世は手と頭を同時に動かし、目を隠して必死に否定した。

「べ、べべ別に、おお俺はだな、たたたたこんな性格なだけであってだな……」

あまりにも必死な様子に、ダイダラボッチは思わず笑った。

「ふふふ、浮世ってわかりやすいね。」

図星をつかれた浮世は、余計戸惑いながらも、どうにか正気に戻った。

正気に戻った所で、ダイダラボッチは気になっていた事を浮世に尋ねた。

「ねえ浮世。君ってさっき、どうやって私についてた枷を外したの？」

その質問は、浮世自身もわからない疑問であつた。  
わからない以上、浮世は、

「えーっと・・・ごめん。俺にもわからないんだ。」

少し申し訳なさそうな様子で返した。

その返事に、ダイダラボッチはある仮説を立てて浮世に言ってきた。

「浮世。私が見ただけだけどね、枷がああなつてた所から見ると、君はもしかして、能力を持っているのかもしれないんだ。」

その言葉に、浮世の頭の中ではただ疑問だけが浮かんでいた。

「能力？なんだ、能力を持つって？」

浮世の問答に、ダイダラボッチがビシッと答えた。

「能力っていうのはね、この世界にいる者達が持つ事のある、特殊能力の事なの。例えば私の場合なら、妖怪の類とかを操る事が出来る能力とかになるの。」

その答えに、浮世は更なる疑問をぶつけた。

「え？さっきのボッチが巨大化したのは？」

その問いにも、ダイダラボッチは軽快に答える。

「あれは妖怪である私の力。能力っていうのはもつと違う物だよ。」

簡潔な答えに、浮世はそれなりに悩みこんだ。

自分の能力がなんなのか・・・あまり検討がついていないといつてもおかしくはない。

俺は、ダイダラボッチを拘束していた枷をその手で壊した。無意識とはいえそれが能力なのか？

だが冷静になれば、それだけでは能力の断定などできない。しばらくして、浮世はとりあえずダイダラボッチに尋ねた。

「ボッチ、俺は正直自分の能力が何なのかよくわかっていないんだ。だからボッチに俺の能力を見定めてほしい。」

結構な無茶振りに、ダイダラボッチは、

「うーん、そうだねえ・・・」

と考えこんだ。

じつと考えているダイダラボッチに、答えを急ぐ浮世は落ち着けずにはいられなかった。

そんな浮世に、ダイダラボッチがこんな答えを出してきた。

「ごめんね。私も出ないの。」

その一言に、浮世はため息と同時に自分を無理矢理納得させた。

まあこれから追々わかるか・・・



そう自分に言い聞かせて、浮世はまた歩き出すのであった。

## 第二話 疑念（後書き）

後書き

えーっと、二人ともほとんど進んでいませんね。ただただ道ばかりで。

でもこれで結構二人の事がわかったと思います。

次はもっと違う人が出てくると思いますので、是非ともご期待ください。

では、第二話をお楽しみに。

### 第三話 人里（前書き）

ありのままあらずじ

ダイダラボッチに道案内してもらっていた浮世は、ダイダラボッチが本当に妖怪なのか気になったので尋ねたら、大きくなって証明してきた。その後ちょっといい雰囲気になったが、やっぱり二人は歩くのであった。

## 第三話 人里

### 第三話 人里

ひたすらに森の道を歩き続ける二人。そろそろ浮世のしびれが切れそうになった頃、二人の前によくやく木々とは違う物が見えてきた。見えてきたのは、恐らくは多くの人々が暮らしていると思える人里である。

遠くから見た限りでも、活気に溢れ、老若男女が楽しそうに村々を行きかっている風景が見えていた。

ようやく他の人がいる場所が見えたとあって、浮世の心には自然と安らぎが訪れていた。

いてもたってもいられなくなった浮世は、ダイダラボッチに自分の思いを告げた。

「ボッチ。あれって人里だよな？長い道のりだったけど、やっと人がいる所が見つかったなあ。ほら、急ごうぜボッチ。」

ボッチの腕を掴み、その里にすぐにも駆け出そうとしたが、ダイダラボッチがすぐに動こうとしなかった。

唐突な行動に戸惑っただなど思った浮世は、手を放してまた話しかけた。

「ごめんごめん、ボッチにはボッチのペースがあるよな。いきなりこんな事されたらそりゃ戸惑う・・・」

と言いかけた口が、ダイダラボッチの様子を見て閉じてしまった。さっきまでは顔を上げ、笑顔であったダイダラボッチは、今は顔を

うつむけ、暗い調子でいたのだ。

この様子に浮世は戸惑ってしまった。

なぜ急にこうなってしまったんだ？

そう思った時、浮世はある答え導き出してしまった。

もしかしてボッチは、人里に行きたくないのか？

ここまで来てダイダラボッチがこんな様子を見せた以上、このような答えを導き出すのは自然であろう。

しかし、？浮世にとっては困った事である。

浮世は違う世界にいる以上、この世界に知り合いなどいない。

何も知らないまま人里に入るのは、さすがの浮世も困る。

考えた浮世は、落ち込んだ調子のダイダラボッチに尋ねてみた。

「ボッチ、正直に聞くよ。ボッチはあの人里に入りたくないのか？」

その問いに、ボッチはうつむいたまま答えた。

「・・・私だって、人里に入りたいよ。でも、あの人里にいる人達が、私を受け入れてくれるかわからないから、怖い・・・」

不安のこもった声に、浮世は全てを察した。

そうだ、ダイダラボッチは妖怪なんだ。それもただの妖怪じゃない。さっきまであんな所に貼り付けにされていたような大妖怪なんだ。

どうしようもない現実を再確認した浮世。

だが、それに対し浮世はダイダラボッチにこう言い放った。

「大丈夫だ。ボッチは悪い妖怪じゃない。それは俺がよくわかってる。だから、俺がそばにいれば大丈夫だ。それに、黙っていればばれないだろ。」

その言葉に、ずっとうつむいてたダイドラボッチが顔を上げた。

「・・・信じていいの？浮世の事。」

不安と希望が混ざったようなダイドラボッチの声と顔に、浮世が軽快に答えた。

「ああ。信じてくれよ。」

俺に任せると言わんばかりの様子に、ダイドラボッチの顔から不安が消え、希望だけが残っていた。  
ダイドラボッチは、残った希望を声に乗せて浮世に言った

「うん。」

浮世もその言葉から察したのか、何も言わずに二人は人里へと歩いていった。

少しして、二人は人里の入り口と思える所へと着いた。  
行きかう人々、活気のある町並み。遠くから見ていただけでは伝わらないこの感覚を、二人は全身で感じ取っていた。

その感想を、ダイダラボッチが思わず口にした。

「うん、二人つきりもいいけど、やっぱり賑やかなのが一番だね。」

深くは考えてはいないと思える発言に答えるように、浮世も言った。

「あ、ああ。」

浮世は内心少し複雑になった。それでも町並みを眺める内にそれもなくなくなっていった。

じつと町並みを眺める二人、しばらくして、浮世がダイダラボッチに尋ねた。

「なあ、ボッチ。とりあえず来たのはいいけど、まずどうする？」

「そうだね・・・ちょっと町並みを見ていこうよ。」

ダイダラボッチの提案に、浮世はすぐに乗った。

「じゃあ、そうしようか。」

そして二人は、そのまま里を歩き始めた。

歩けば歩くほど、二人はその町並みの良さを感じ取っていった。

ふと、ダイダラボッチが村にある一つの店を指差した。見た限りでは団子屋のようだ。

「ねえ浮世、ちょっとあそこで団子食べようよ。」

隣にいる浮世の服をまるで子供のように引っ張りながら言った。違う方向を見ていた浮世は、その店を見てから答えた。

「それもいいな。」

「じゃあ、行こうよ。」

「ああ。」

店へと向かっていく二人。その時浮世がある事に気づいた。

あ、冷静に考えたら俺、金あつたっけ？

ポケットに手を入れてみたが、何も入ってはいなかった。  
焦った浮世はその事をすぐにダイダラボッチに言った。

「ボッチ！ごめん、俺金ない！！」

謝る浮世に、ダイダラボッチはすぐに返事をした。

「大丈夫だよ。私がいくらか持つてるから。」

そう言つて、浮世にそれらしい物を見せた。

それを見た浮世は、思わず声が漏れた。

「え？」

驚きと呆然が混ざつたような調子の顔になった。

それもそうである。何せそれは浮世にとって見慣れない、昔のお金だったのだから。

呆然として考えた後、浮世はダイダラボッチに不安そうに尋ねた。



「なあ・・・それって使えるのか？」

その問いに、ダイダラボッチは呆れた様子で答えた。

「何言ってるの浮世？これはれっきとしたお金だよ？」

「いや、でも古くないか？」

「古い？これが今のお金だよ。」

その一言が、浮世を更に混乱させた。

しばらくして浮世は、ここが違う世界であつた事を思い出し、それが恐らくは原因だと自分を納無理矢理得させた。

「ああ、ごめんごめん。ここじゃそれが普通なんだな。」

疑念を抱いたダイダラボッチに対して、浮世は言った。

ダイダラボッチは不思議そうな感じで見ていたが、どうしてもよくなかったのか何も言わずに団子屋へと歩いていった。浮世も後を追うように歩いていった。

二人は外の椅子に座り、町並みを眺めながら団子を食べていた。

団子を食べながら、ダイダラボッチは、

「おいしいね、浮世。」

と言ってきたので、浮世も食べながら返した。

「ああ。」

返した矢先に、ダイダラボッチがこんな事を言ってきた。

「でも、一人じゃ多分そんなにおいしくなかったかもね。こうして誰かと食べてるから、本当においしいと思うもの。」

そんな言葉に、浮世は少し戸惑った。

「そ、そりゃそうだろ。一人で寂しく食べてるよりはこうして二人で食べてる方が・・・」

と言っていると、ダイダラボッチの方に村の男と思える者が詰め寄ってきた。

その者は、ダイダラボッチをしばらく見た後、こんな事を言ってきた。

「お、君ってよく見たら・・・」

と言おうとしていた時、浮世の中で少しの不安があった。

もしかしてこいつ、ダイダラボッチが妖怪である事に気づいたのか？

だがそんな不安は、男の続けた言葉からすぐになくなった。

「結構かわいいじゃん。もしかして、君って今一人？」

どうやらどこにでもいるただのナンパ男だったようだ。

浮世はほっと一安心した後、ちよっとだけ違う不安をよぎらせた。

浮世はそばにいたからこそ思っていた。ダイダラボッチは浮世からだけではなく、全般的に見てかわいいと思われていたようだ。

このままこのナンパ男の誘いに乗るとは思えないが・・・

浮世が変な心配をして見ていると、ダイダラボッチがナンパ男にこう返答した。

「ごめんなさい、今は一人じゃないの。」

「へえ、じゃあ誰といるの？」

と尋ねると、ダイダラボッチはとっさに浮世の腕を両手で掴んで答えた。

「この人。」

これみよがしな様子に、ナンパ男は何も言えずにそのままその場を後にした。

去っていった後、ダイダラボッチがほつとした様子を見せた。

「わかってくれたみたいだね。よかったあ。」

と言っている隣で、浮世がひたすら戸惑っていた。

掴まれた腕には、よく見たらダイダラボッチの大きな乳房が少し当たっていた。

「ボボボッチい？ ななな何のつもりで、こここんな事やったんだあ？」

パニクる浮世に、ダイダラボッチはひょうひょうとした様子で答えた。

「え？だってあういうのはこうして見せ付けた方が早いと思っただもの。」

「そそそそれにしてもだな、いいいきなりと言っつのは、ささささすがにだな・・・」

真っ赤な顔で忠告しようとする浮世に、ダイダラボッチが不満そうな顔をして言ってきた。

「・・・浮世は、私とこうしてるの、嫌なの？」

そんな問いに対して、浮世はオーバーヒートしたかのようにばたんと倒れてしまった。

その様子にダイダラボッチは驚き、すぐさま浮世の元に駆け寄った。

「浮世、どうしたの急に？浮世。」

耳元で呼びかけても、目が回ったような顔をしている浮世は起きそうにない。

困り果てていると、近くから誰かの声がした。

「あら？誰か倒れているわね。」

ダイダラボッチが声のする方に振り向くと、そこには頭に十字のマークのついた帽子を被り、赤と青がくつきりと分かれた服を着ていた長身の女性がいた。長い髪の毛は後ろで束ねていた。

ダイダラボッチは、誰かもわからない以上、まずは名前を尋ねた。

「あなた、誰なの？」

「私？私の名前は、八意 永琳。これでも医者よ。」

「お医者さん？」

「ええ、せつかくだから、そこに倒れている子を診てあげるわ。」

そう言いながら、倒れた浮世の傍に駆け寄った。

しばらく様子を見る永琳。心配になったダイドラボッチが尋ねてきた。

「あの・・・どうなの？治りそうなの？」

その問いに、永琳が逆に尋ね返した。

「あなた、この子が倒れる前はどうしてたの？」

「えーっと、私と浮世は二人つきりでいたんだけど、面倒臭そうなのが来たから追い払おうと浮世の腕を掴んで、こうしてるのって嫌って言ったら、急に倒れたの。」

間違っではない報告に、永琳は少し呆れた様子を見せた後、ダイドラボッチにこう言った。

「そうね、どこか休めそうな所を見つけて、この子を休ませてあげて。それから、あまりこの子にべたべたしすぎないようにね。」

と言いついて、永琳はその場を後にした。  
残されたダイドラボッチは、

「・・・休めそうな所って、やっぱりあそこだよね。」

と言いながら、浮世を担いで行ったのであった。

### 第三話 人里（後書き）

後書き

ペースとか考えてません。それがこれですよ。

とりあえず東方キャラ第一号として、永琳を登場させてみました。かなりサブ的な感じがちょっとまずかったですね。

最初に言いましたけど、これは本当にやりたかっただけが集合しているので、正直うえってなる所もあるかもしれません。

それでもついてきてくれるみなさんには、本当感謝しています。

それでは、次はどうなるかはわかりませんが、第四話をお楽しみに。

#### 第四話 宿（前書き）

ありのままあらずじ

歩き続けて人里についた二人は、町並みを眺めた後に団子屋でゆっくりしてたら目障りなのが来たのでダイダラボッチが見せ付けたら、浮世がばたんきゅーして、永琳が気休めの診断を出した。



## 第四話 宿

### 第四話 宿

「・・・ん？」

浮世が目覚めた時、浮世はどこかもわからない部屋の布団に寝ていた。

とりあえず体を起こしてどうなっているのかを確認した。

部屋の間取りは畳が六畳ほどで、無地の襖と窓があった。

確認した後、浮世は自分がなぜこうなったのかを思い出そうとしていた。

確か・・・ボッチが俺の・・・腕を・・・

と思い出そうとした矢先に、浮世の頭は煩惱で一杯になった。そしてまた顔を真っ赤にした。

浮世はそういう事に関して、ほとんど弱い男のようである。

電池の切れたおもちゃのようにただぼーっとしていると、ダイダラボッチが襖を開けてきた。

「やっと起きたの？浮世。」

襖から覗くように浮世に尋ねた。

声が届いてないのか、浮世は今だにぼーっとしている。

様子がおかしいと思ったダイダラボッチは、浮世の目の前に立ち、浮世の顔をじつと見た。

顔を真っ赤にし、心ここにあらずな浮世に、ダイダラボッチはどう

しようかと考えた。

しばらくしてダイダラボッチは、浮世のデコに軽くデコピンを放った。

ビシッとした音とともに、浮世は目を覚ましたようだ。

「いたっ！」

軽いリアクションを取った後に、浮世はすぐさま自身のデコを手で覆った。

突然の事に戸惑いながらも、浮世はどうか目の前に立っているダイダラボッチの存在を確認した。

そしてデコの痛みから、浮世は犯人が誰なのかすぐさま判断した。

「い、いきなり何するんだボッチ！？」

ちょっと怒った様子でダイダラボッチに尋ねると、ダイダラボッチは、

「だって、浮世ったら声をかけても起きないんだもの。だから実力行使に出ました。」

と言いながら、笑顔でデコピンを放った指を浮世に見せ付けた。

この様子に浮世は、

「実力行使って・・・今時デコピンはないだろ・・・」

と呆れた様子で軽いため息と共に肩を落とした。

そんな事などお構いなしに、ダイダラボッチが浮世に尋ねてきた。

「ねえ浮世、なんでさっき、体を起こしたままぼーっとしてたの？」

その疑問に対し、浮世はさっき思い出していた事をまた思い出した。  
そうだ、俺が意識を飛ばしていた理由は・・・

その理由に到達した時、浮世の視線はダイダラボッチの大きな乳房にいつていた。

それが少なからず原因である以上は、視線がいつでも仕方ないだろう。

それでも、ダイダラボッチからしたらさすがに様子がおかしいと思うだろう。

「浮世つてば、聞ってるの？」

浮世に再び尋ね返すと、浮世は驚いた様子で反応した。

「あ、ああ。ごめん・・・またぼーっとしてて・・・」

頭をかき、申し訳なさそうな様子でダイダラボッチに言った。  
その様子にダイダラボッチは、

「・・・まあいいや。そんな事聞いても仕方ないもんね。」

と察した様子で浮世に言った。そのままダイダラボッチは話を続けた。

「それから、浮世に言っておくね。さっき浮世が倒れた時に、たまたまお医者さんがそこを通ってくれて、浮世はとりあえず休んでたら大丈夫なんだって。後、ここは村の宿の宿泊部屋だからね。」

と懇切丁寧に、浮世に説明をした。

それを聞いた浮世は、それまでの疑問を全て納得させ、とりあえず一安心した。

そんな様子の浮世に、ダイダラボッチがこんな事を言ってきた。

「あ、そう言えば私もお医者さんに、こんな事言われてたんだ。」

その一言に、浮世は恐らく見当違いの不安をよぎらせた。

「まさか・・・ボッチの身に何かあったのか!？」

と真剣な眼差しで言ったが、当のダイダラボッチはのん気な調子で答えた。

「いや、一応私の事なんだけど、浮世が関係してるの。」

「俺が関係している?どういう事だ?言ってくれ。」

「うん。えーっとね、浮世にあんまりべたべたしちゃ駄目だつて言われたの。」

その一言に、浮世は思わずえーっとでも言っているかのような顔になった。

「そ・・・そんな事?」

浮世自身はもつと深刻な事態かと思っていいたらしいが、これでは肩透かしもいいところである。

そんな事は露知らず、ダイダラボッチは軽い調子で答えた。

「うん。」

その一言によって、浮世は落胆と安心が混ざったような事態に陥った。

しばらくして浮世は、枕にまた頭を乗せて軽いため息を吐いた。がっかりとした様子ではあるが、浮世の内心は安心の方が大きかった。

とにかく、ボツチは大事には至ってなかったんだな。

その思った浮世の顔は、いつもの笑顔に戻っていた。笑顔に戻った所で、ダイドラボツチがこんな事を尋ねてきた。

「ねえ浮世、聞きたい事があるんだけど。」

「何だ？」

「・・・べたべたするって、何？」

その質問に、浮世は思わず戸惑った。ダイドラボツチがその事を知らなかった事と、その事を言わなければならない二つの意味合いによつてだ。

浮世はどう言おうかと迷った。と言うか言つべきなのかすら迷った。悩みに悩んだ末、浮世がダイドラボツチに答えを教えた。

「・・・あのな、べたべたするっていうのは、恋人同士がするような事を指すんだ。俺とボツチは恋人同士じゃないから、そんな事をするのはおかしいんだ。」

合っているのかよくわからない答えに、ダイドラボツチは、

「なるほどお。だから浮世は、いきなり倒れたりしたんだね。」

痛い所を突く様に答えた、

「・・・とにかく、これから過度のスキンシップは控えるように。」

教えるような感じで、ダイダラボッチに言った。

「はい。」

ダイダラボッチは子供のように素直な返事をした。  
返事をした後で、浮世がダイダラボッチに尋ねてきた。

「なあボッチ、今の時間はどうなってるんだ？」

その問いに対して、ダイダラボッチは、

「えーっと・・・ちよつと待ってね。」

そう言うと、ダイダラボッチは立ち上がり、おもむろに部屋の窓を開けた。

窓を開けると、そこから綺麗な夕日が部屋に差し込んできた。

「もう夕方みたいだね。」

わかりきった答えに、浮世は、

「そうだな。」

とよくわかったとでも言いたそうな顔で答えた。  
そして浮世が、続けてこんな事を言ってきた。

「じゃあ、今日はとりあえずここに泊まるとするか？」

浮世の問いに、ダイダラボッチは、

「大丈夫だよ。この部屋でもう決めてるから。」

とわかりきっていたかのように答えた。

その答えに浮世は一安心した後に、ある疑問をダイダラボッチにぶつけた。

「・・・ボッチ、今この部屋って言ったけど、もしかして相部屋なのか？」

その問いに、ダイダラボッチは、

「うん。もちろん浮世と一緒にだよ。」

と少し嬉しそうな様子で答えた。

その答えに浮世は開いた口がふさがらなくなった。

「え？え？ええええ！？マジで言ってるのか!？」

焦る浮世に、ダイダラボッチは、

「だって、そうじゃないと部屋代とか無駄になるでしょ？二人ならこの広さで十分だよ。」

「いやいや！俺が突っ込んでるのはそういうとこじゃなくてだな、男と女が同じ部屋と屋根の下で二人つきりつてのはさすがにまずいと……」

と言いかけた時に、浮世の言葉が思わず止まってしまった。

なぜなら、ダイダラボッチがぼろぼろと涙を流していたからだ。

「……なんでよ、なんで浮世はそんなに私といたがらないの？私の事が嫌いなのか？私と一緒にいるのが嫌なのか？教えてよ……ねえ……」

涙で崩れ去ったダイダラボッチに、浮世がダイダラボッチの頭をなでてきた。

「……俺がボッチの事、嫌いな訳ないだろ？違うよ。ただ俺達にはまだ早すぎるだけだよ。わかってくれないか？」

浮世の一言に、ダイダラボッチは顔を上げて、小さくうなずいた。うなずいた後で、ダイダラボッチが小声で浮世に尋ねてきた。

「……同じ部屋じゃ、駄目なの？」

その問いに、浮世は、

「そうだな。宿代がもつたいないから、それぐらいはいいか。」

浮世のその一言で、ダイダラボッチは普段以上の笑顔になった。その顔にはもちろん、涙は流れていなかった。ただ笑顔だけであった。



## 第四話 宿（後書き）

後書き

さすがはやりたかったただけでありますね。半端じゃありませんねこのノリ。

ここまで付き合ってくれている強者はどれぐらいいるんでしょうか。本当色々ごめんなさい。

それでも本人は真面目にやっているんですよ。本当ですよ？

三人一緒にと違って本当ゆっくりですね。遅すぎるぐらいですかね？

更新はあくまで不定期ですので、これからもそれをお願いします。

あ、その事で一言ありました。三人一緒にも読んでくれている人なら気づいているかもしれませんけど。

これからの更新ですけど、あくまで不定期ですが土曜日の昼から夜にかけて一応定期更新をする事にしました。

なので、これからはそれを一応の目安としてください。

それでは、第五話をお楽しみに。

## 第五話 夜の来客（前書き）

ありのままあらずじ

意識を失った浮世をダイダボツチが宿で寝かせ、浮世が起きた後で二人がちよっともめたけど、少しいい雰囲気になった。

## 第五話 夜の来客

### 第五話 夜の来客

話し合いが終わり、時間的にはもう夜になってきた。

浮世はとりあえずトイレに行こうと思い、ダイダラボッチに一言断ってから厠へと急いだ。

用をたし、浮世は手を洗いながら、ふとこんな事を思っていた。

それにしても・・・この村はあまりにも古すぎる気がするな・・・

ダイダラボッチが使っていた金銭は別にしても、ここは年代的にあまりにも古すぎる。

いくら田舎だと言えども、ここまで浮世との世界との年代差があるのは妙な事である。

仕方がない、後でボッチにちょっと聞いてみるか。

そう思い立った浮世は、厠から出て廊下を歩き出した

浮世が長い廊下を歩いていると、浮世が突然廊下の何も無い所に体をぶつけてしまった。

それなりにリアクションを取った後で、浮世は自分の身に起きた不自然な出来事に困惑した。

浮世の目の前には何もない。しかし、浮世は確かに何かにぶつかった。

不思議に思った浮世は、ぶつかったと思える所をそくと触ろうとすると、今度は後ろから自身のズボンが引っ張られた。

引っ張られたとは言っても、大した力ではなかったので、浮世はと

りあえず後ろに振り向いた。

そこにいたのは、頭巾が被り、背丈は浮世の腰辺りと思える少女であつた。ズボンを引つ張つたのはどうやらその子のおうである。

・・・この宿に住んでる子か？

そう思いつつ、少し戸惑いながらも、浮世はしゃがんで目線に合わせてから、その子に話しかけた。

「えーつと、何の用かな？」

笑顔で尋ねる浮世に、その子はなぜか何も言わなかつた。ただだんまりを決め込んでいる。

不自然に思つた浮世は、またその子に尋ねた。

「俺の言つてゐる事、わかる？」

浮世がさういうと、その子は一言も喋らずにうなずいた。

その様子から、浮世はこの子に何か理由があつて喋れないのかと判断した。

そう思つた浮世は、その子にこんな事を言つた。

「じゃあ、何か伝えたい事があるなら、身振りとかで教えてくれな  
いか？」

さう言つと、その子はさつきと同じようにうなずいた。  
それを確認してから、浮世はさつきした質問をまた言つた。

「で、何の用かな？」

と言うと、その子は浮世がさっきお願いした通り、身振り手振りで教えてきた。

浮世はとりあえずそれを口に出して確認していった。

「えーっと、私は・・・人を・・・探している・・・その人の特徴は・・・額に大きな目をしていて・・・髪が長くて・・・ぼーっとしてて・・・胸が大きい・・・だね。」

と浮世が確認を取ると、その子はまたうなずいた。

口に出して確認していた浮世は、その子が尋ねたい事をまとめた。

「うーん、この子はどうやら誰かを探しているみたいだな、特徴が確か・・・」

と思い出そうとした瞬間、浮世は真っ先にある者を思い出した。

待てよ・・・この子の挙げた特徴を全部足すと・・・あいつしかないじゃないか。

と思い立った浮世は、その子に探し人が誰なのかを訪ねた。

「なあ、君が探しているのって、もしかしてダイ・・・」

と言おうとしたその時、丁度浮世の後ろから、ダイダラボッチがゆっくり歩いてきた。

「あ、浮世。廁が長いから私、部屋を出・・・」

と言いかけた時に、浮世と話をしていた子が、突如ダイダラボッチに飛び込んできていた。

「わわわっ！」

突然の事に慌てるダイダラボッチだが、その子はどうにか自分の胸元で受け止めた。

受け止めた後で、ダイダラボッチはその子が誰なのか確認しようと顔を見た。

その瞬間に、ダイダラボッチの表情が突如変化した。

「・・・ぬうちちゃん？ぬうちちゃんだよね？そうだよね！？」

何度も確認をするダイダラボッチに、その子、つまりぬうはただうなずいた。

「こんな所で会えるなんて、思ってもなかったよ、ぬうちちゃん。」

懐かしさと嬉しさの混ざった調子で言っていると、ぬうがダイダラボッチにぎゅっと抱きついてきた。

恐らく、長い間ダイダラボッチと会えなかった寂しさから、自然とその行動をしているのであろう。

嬉し涙を浮かべて抱きつくぬうに、ダイダラボッチはぬうの顔をただじっと見つめた。

二人のその様子は、さながら母と子のようであった。

そんな様子が続いている内に、すっかり外野状態の浮世が、気まずそうにダイダラボッチに尋ねた。

「ボッチ・・・その子って、一体何なんだ？」

と言うと、ダイダラボッチが浮世の方を見てから答えた。

「この子はね、私の友達のぬうちちゃんって言うの。これでもこの子、塗り壁って妖怪なの。」

と説明するダイドラボッチに、浮世はまた尋ねた。

「塗り壁？その子がそうなのか？とてもそうは見え・・・」

と言っていると、浮世は背中に何かがぶつかったような感覚に襲われた。

体がぐらつとなり、慌てた浮世はすぐさま後ろに振り返った。

そこにいたのは、これぞまさに塗り壁と言わんばかりの者が立っていた。

言葉を失う浮世を尻目に、ダイドラボッチがその壁に話しかけた。

「あ、ぬうちちゃんがいるから、やっぱりかあ君もいたんだね。」

とまるでいたのが当然かのように言うと、その壁、すなわちかあが口もないのに口を開いてきた。

「かあとぬうは一心同体。かあいなければ、ぬうはいられない。また、ぬうがいなければ、かあもいられない。」

と随分硬い調子で返してきた。

言葉を失っていた浮世は、そろそろ我に返り、そのままダイドラボッチにまた尋ねた。

「ぼ、ボッチい？こ、この壁って・・・」

と浮世はかあを指差して尋ねた。

ダイドラボッチはさっきと同じ調子でまた言った。

「うん、その子も、私の友達のかあ君。多分浮世の言う塗り壁ってイメージは、かあ君の方だね。」

と察した調子で言った。

「ま、まあ・・・」

と浮世は今だに戸惑いながらも、どうにか返事をした。  
その時に、浮世の後ろでかあが浮世に話しかけてきた。

「お兄さんはさっき・・・このかあにぶつかったか？」

と尋ねられた浮世は、身に覚えがないと思いつつ、さっきあった事を思い出していた。

さっき、浮世は確かに目に見えない壁にぶつかった。しかし、今日の前にいるのは紛れもなく目に見えていた。

その事から、浮世はあった事をそのままかあに言った

「えーっと・・・さっき、見えない壁にならぶつかった記憶があるけど・・・」

と言うと、かあが体の端についている手を浮世の肩をぽんと叩いてきた。

「それはまさしく、かあの事だ。」

と言われて、浮世は疑問をそのままかあにぶつけた。

「え？今の君は見えてる気がするけど・・・」



と言うと、かあは自慢げに語ってきた。

「かあは、姿を隠す事ができるのだ。だから、お兄さんはさっきかあにぶつかったのだ。それはつまり、かあの思惑通りなのだ。」

と言われて、浮世が戸惑っている内に、ダイダラボッチが後ろから浮世に話しかけてきた。

「浮世、塗り壁って妖怪はね、自分の企みとかがうまくいくと喜ぶ妖怪なの。だから、かあ君は今喜んでるのよ。」

と言われた浮世は、さっきまでであった疑問とともに、それまでであった事に全て合点がいった事を自己確認した。

そうか、これが妖怪って物なのか。

浮世はただ、目の前にいる妖怪と、それが持つ習性に感心した。そして浮世は、とりあえずダイダラボッチにある事を尋ねた。

「ボッチ、この子達は、これからどうするんだ？」

と言われて、ダイダラボッチは、

「そうだね、せっかくだから、私達の部屋でみんな泊まる事しない？あの部屋なら、むうちゃんやかあ君も寝られると思うの。」

と浮世に返した。

そう言われた浮世は、

「・・・それはいいんだけど、この子達はとうなんだ？」

と尋ねたので、ダイダラボッチがむうとかあの二人？に、

「あのね、むうちゃんにかあ君、これから私とこの人はこの宿の同じ部屋で寝泊りするんだけど、二人はどうか？一緒に寝泊りしない？」

と二人に尋ねた。

むうはダイダラボッチに対して黙ったうなずき、かあは、

「むうがいいなら、かあもいい。」

と答えた。

「じゃあ、晩御飯を食べた後に、みなでお部屋に行きましょう。」

と言った後、ダイダラボッチは道案内でもするかのように、晩御飯が用意されている所へと歩いていった。

他の三人も当然ダイダラボッチへついていった。

廊下を歩いている時に、浮世がふとある疑問を抱いた。

冷静に考えたら・・・かあ君ってどうやって襖を超える気なんだ？

そう考えてから浮世は、後ろをゆっくりと歩いているかあに目を向けた。かあの大きさはどう見繕っても天井ぎりぎりの大きさである。浮世にじつと見られたのが気になったのか、かあが口を開いてきた。

「どうしたんだ、浮世お兄さん。かあの体がおかしいか？」

「いや、おかしいと言うか・・・正直に言うと、君はどうやって襖とかを超える気なんだい？」

疑問をそのままかあにぶつけると、かあは鼻で笑ってきた。

「それなら大丈夫だ。かあは大きさも変えられるのだ。これは普段の大きさよりまだ小さいのだが、もっともっと小さくもなれるのだ。せっかくだから、浮世お兄さんに見せてあげよう。」

と言うと、かあは天井までの高さから、浮世と同じぐらいにまで縮んだ。

その様子を見た浮世は、ただ納得するしかなかった。

食事が終え、浮世達は寝泊りする部屋にて就寝していた。

現代とは違い、一つのろうそくの小さな光だけが、全員が布団で寝ている部屋を照らしていた。

恐らく全員が寝静まったと思えた時、浮世だけはどうも寝られない様子を見せていた。

浮世が寝られない理由・・・それは、今の自分がなぜこんな世界にいるのかと言う疑問であった。

浮世にとって、まったく見慣れない世界。所々が浮世にとって、勝手が違っていた。

それでも浮世は、この世界が自分の世界より恐らくいい世界だと思っていた。

その理由は、この村の人々の暖かさである。

自分のいた世界ではどんどん失われている人情。だが、この世界はあまりにも人情で溢れていた。

それが浮世にとっては、とても喜ばしい事であつたらしい。

そんな事を思っている内に、浮世もまた睡魔に襲われ、皆と同じように眠りについた。

自分がなぜこの世界に来たのか、知るよしもなく、深く思う事もなく・・・

## 第五話 夜の来客（後書き）

後書き

ええつと、とりあえずこんにちわ。

ペースは友達からも言われましたけど、相変わらずゆっくりです。まあ勘弁してくださいな。とりあえず一日目は終わりましたよ。

今回から新キャラとして、塗り壁妖怪コンビのぬうつと、かあつてのを出してみました。名前の由来とかはまあまんまです。

むうはキャラ的に当然なんですけど、かあも一応精神は子供って事を覚えておいてくださいな。

てか、かあつて読みにくいですね。まあ仕方ないんですけど。

ここだけの話ですけど、塗り壁って本当はこの話のぬうつみたいな妖怪らしいですよ。眉唾ですけど。

後、わしは食事のシーンとかほとんど書きませんので、それも気持ち覚えておいてください。

では、第6話をお楽しみに。

## おしらせ

お知らせ

これからの澄田の小説は、バクテリアではなく、澄田のアカウントで投稿させていただきます。

なので、こちらの方は事実上の凍結とさせていただきます。

あ、心配しなくても大丈夫ですよ？あくまでアカウントが変わる以上、そっちに移転しなければいけないので、これからも澄田の小説はしっかりと投稿していきます。

なので、質問や評価やレビューやお気に入り登録などは、そちらの方でお願いします。

お手数をおかけして、真に申し訳ございませんでした。 m (——) m  
これからのニュー澄田に、是非ともご期待ください (#^|^#)  
ps、少し時間がかかりますので、それまでお待ちくださいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5902n/>

---

導かれし者が幻想入り lock pass meseege.

2010年10月27日01時43分発行